ヒタ〳〵ト旗指物ヲ投入々々、ハヤ城内ヘ乘入ラントス、城兵忽力ツカレ、笠ヲ出シテソレニ居給フ、

〔板坂卜齋記下〕三右衞門（藤○進）中納言殿（秀家○浮田）ヘ申上候は、大坂ヘ參上可申候、御狀被遊候へと申、四寸四方程なる紙に、狀被遊候を、編笠の緒は縷付て、二日に大坂ヘ行著、中納言殿御屋敷御臺所ヘ這入候へば、（略○中）無程局出會れ候、編笠の緒ヘ縷交候御狀を取出しひろげ見せ候へば、一見せられ、奥ヘ這入、（略○下）

〔西鶴名殘之友三〕元日の機嫌直し

室町通り西行櫻の町に、御所染の絹商賣して、菱屋といへる人あり、（略○中）身の上次第に面白からぬ年くれて、餘所の寶を數ふる隱裝かくれ笠に袋を打出の小槌まで、繪書きたる舟を、敷寢の夜の夢に、（略○下）

〔嬉遊笑覽二中器用〕あみだ笠は笠の名にはあらず、笠を仰いて後の方へ著たるが、佛の後光めく故にいふなるべけれど、さてはあみだに限りたることにはあらず、思ふに守武千句に、南無あみだ笠きぬ人もなし、といへる秀句ありしより、あみだ笠は出しなるべし、且かく著るは、笠の緣の物に障るによりて也、俳徊世話盡旅部に、餅食笠と云詞あり、是も同じ著やうにや、

〔守武千句〕猫何第二

けん物にみな後の世やねがふらん
なむあみ笠をきぬ人もなし

〔西翁十百韻〕戀俳諧

見返しの笠の內をもちらとみて
南無あみだ佛戀はくせもの